2025（令和７）年度

３月７日［◎］

国　　語

注　意

1. 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
2. 問題は声を出して読まないこと。
3. 問題用紙は二十一ページ、一、二 の二題から成っている。
4. 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない**。
5. 解答は必ず**黒色鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること**。
6. 解答はすべてマーク式の解答欄①②……を丁寧に塗って解答すること。
7. 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消すこと**。
8. 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
9. 解答用紙を**折ったり、汚したりしないこと**。

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

絶えず目に飛び込んでくる情報をどう扱えばよいのか、そして、物事をどう考えていけばよいのかを知らないままゲームにのめり込んでしまい、そのつど飛び込んでくる情報に右往左往していたら疲れる。それだけではなく、いつの間にか、スマホやタブレットを確認することが一種のキョウハク(ア)観念になってしまい、そこに閉じ込められて、その外部に出られなくなっているとしたら、これはさらにまずい状況だろう。言うまでもなく、世界はサイバースペースよりも大きいからである。現実世界の方に新しい可能性が存在することだってあるのだ。

真偽不明の情報に晒(i)され続けた結果、この世界に事実は存在しない、という相対主義的見方を身につけ、ポスト・トゥルース[注1]の世界像に慣れてしまうことも問題である。［　X　］のだ。思考停止の結果、根拠不明の陰謀論を唱え始める人も出てきている。哲学の観点では、相対主義と独断主義が再び姿を見せている、と考えられるのだ。

以下では、世に出回る言説の真偽を自分で判断する思考法、すべては社会的に構築されているとする構築主義の限界、ポスト・トゥルースが［　I　］する現代の問題、またこれと深く関係するフェイクニュースや陰謀論に巻き込まれないための姿勢、そして、ポスト・トゥルースを乗り越えて〈私〉を取り戻す方法を見ていく。

発信元を確認すること、複数の情報源をサンショウ(イ)すること、拡散するまでに時間を置くこと、ファクトチェックにかけることなど、インターネットで得られた情報を扱うためのノウハウは巷にたくさんある。しかし、哲学的に言えば、問題の本質は、インプットした情報をどう処理するのか、言い換えれば、その事象をどのように考えていくのか、という思考の方法である。その原理について、ここでは具体的なイメージをつかむために、私自身が先の投稿[注2]をきちんと考えてみよう。

私だったら、ベンギ(ウ)上、先の投稿の内容を二つの部分に分ける。たとえば、こんな感じである。

（一）生まれてきたら幸せになれない可能性が高いことは哲学で証明されている。

（二）生まれてきたら幸せになれない可能性が高いから、生まれてこない方がいい。また、子どもをつくるのは悪いことである。

まず、（一）の解像度をあげていこう。生まれてきたら幸せになれないとは、どういう意味なのだろうか。詳しいプロセスは後に示すことにして、ここでは端的に「幸せ」の本質を現象学的に取り出してみよう。私の意識体験を反省してみると、幸せは欲望が充足して安定している状態、すなわち、心が充ち足りた「状態」として現われる。また、幸せは「理念」としての本質も持つだろう。幸せの概念には、欲望が充足した心地よい状態の持続や、あらゆる欲望が完全に充たされた極限の想定が含まれているからである。それは、具体的なイメージを持たないまま「幸せになりたい」とつぶやいているときの、あの「幸せ」の感じだ。したがって、幸せの本質には「状態」と「理念」の二つがある、と言えそうである。

だとすれば、幸せと欲望はセットである、ということになる。欲望がまったく動かないとしたら、それが充たされることもないので、幸せは生じない。お腹が減るから美味しいものを食べたときに、幸せを感じられるのだ。何らかの欲望から幸福の秩序は現われており、欲望がなければ、幸せも不幸せも存在しない。

ところが、欲望は人によって異なり、またそれは一人の人間の中でも――場合によっては互いに対立する欲望が――同時に複数あるだろう。それゆえ、幸せの具体的内実は人によって異なる。また、時間的な変化も考慮に入れる必要がある。《　a　》

また、何を幸せと感じるのかは、人が置かれた状況や［　Ⅱ　］によっても左右されるはずだ。たとえば、周囲の人が貧しければ、貧しいことを不幸だとは思わないかもしれないが、周囲の人が裕福な場合、自分の貧しさが際立ってきて、それを不幸だと感じるかもしれない。とはいえ、自分たちだけが貧しい場合でも、家族や友人に恵まれたら、貧しいことを不幸せだと思わない人もいるにちがいない。

では、生まれてきたら幸せになれないとは、人間の最も重要な欲望を一つに限定できるとしたうえで、それが充たされない、ということなのか。あるいは、もっと一般に、欲望が充たされるための社会的条件が悪くなっている、ということなのか。そ

れとも、別の意味を持つのか。私の観点からは、どうしてもこの辺に曖昧さが残る。《　b　》

ところで、なぜ私たちは幸せについて考えてしまうのだろうか。動物的欲求や人間的欲望を充たしたいだけなら、それを実現するための手段の考察に時間を割いた方がよさそうなものである。幸せを問うことのうちには、別の何かが潜んでいるにちがいない。どうして、幸福は人間の根本問題となるのだろうか。

私の考えは、こうである。家族と過ごす何気ない現在の一場面に幸せを感じたり、あの時は幸せだったな、と、もう戻ってはこない過去の情景に想いを馳せたり、いつか幸せになりたいな、と、自分の願いを未来に託したりしながら、人間は生きている。忙殺される日々の合間に、この大変な日々をいつか幸せだったと懐かしむときが来るかもしれない、という幸福の認知の予期もやってくる。現在の幸せは永遠には続かない、という終わりの予感に心が暗くなることもあるだろう。《　c　》

幸せについて考えているとき、意識体験に立ち上がっているのは、単なる欲望の充足や不足ではない。そこには、〈私〉の生に対する納得や期待や幻滅があるのだ。言い換えれば、幸せって何だろう、とつい考えてしまうとき、私たちは、後戻りのできない一回限りの生において、どのような欲望を大切にしていきたいのか、ということをも考えているのである。つまり、幸せを感受したり、予感したり、懐かしんだりすることで、〈私〉は自らの欲望や生の状態を見つめ直している、ということだ。こうやって生きていてよいのだろうか、と、そう自分に問いかけているのである。《　d　》

こう言ってみることができる。幸せの具体的内実は、その人の生まれ持ったシ(エ)シツや性向、価値観や関係性、文化的背景や社会状況に大きく依拠する。この意味では、幸せは相対的なものにすぎない。そうでありながら、幸せが人間にとって普遍的な問題でありうるのは、一回性をその本質とする有限な生の中で、放っておけば無限に増殖しうる欲望を、環境の制約や能力の限界と折り合いをつけながら取捨選択しなければならず、その偶然とも必然とも言えそうな、また受動的とも能動的とも見えそうな、生の淘汰に誰もが納得したいからである。すなわち、［　Y　］から、人間は幸せとは何かを考えてしまうのだ。

出生の条件の悪さや能力の限界に打ちのめされ、絶望する。しかし、何とかそれを突破しようと努力する。それでもやっぱり駄目なこともある。人に助けられることもあるし、人に騙[ii]されて辛くなることもある。何かに夢中になったこともあるが、

人生がだるくて惰性で生きていたこともある。こんなことを繰り返しながら、しかし自分なりに生きてきたことを見つめている。そして、〈私〉はこれからもこうやって生きていく。幸せの問いには、このような物語的自己了解がある。《 e 》

もちろん、生まれてきたことを後悔している人はいるだろうし、生まれてこない方がよかったと考える人もいるにちがいない。私の人生は辛い、生まれてこない方がましだった――この深いリアリティに疑念を挟むことに意味はない。しかし、このリアリティを幸せになれない可能性と関連づけて一般化できるかどうかは、まったく別の話である。幸せの意味を問うことの方に、人間の本質的かつ普遍的な問題がある、と言えるのかもしれない。（一）の最後の部分はどうだろうか。幸せになれない可能性が高いことが哲学で証明されている、と書いてあったら、何となくそこに厳密な論理が介在しているような気がする。「哲学」というワードは、難解かつ深遠な雰囲気を醸し出すのには、都合のよい便利な言葉だ。でも、先の文章では、どの哲学者がどう証明しているのかは明らかにされていない。

ここで哲学者の名前が出ていたとしても、その証明を過不足なく伝えることは難しい作業である。プロの哲学研究者でも、訓練を積んでようやくできることなのだから。生まれてきたら幸せになれない可能性が高いことは哲学で証明されている。この言い分だけでは、真偽を判定するための材料が揃っていない。これが（一）についての私のコメントである。

B 今度は、（二）である。かりに生まれてきたら幸せになれない可能性が高いとしよう。しかし、だからといって、一般に生まれてこない方がいい、と言えるのだろうか。この世界に幸せを感じながら生きている人はたくさん存在する。自分は生まれてこない方がよかったと思っている、という主張であれば、私はその考えを尊重する。しかし同時に、私は、その考えを共有できる人は限られている、とも言うだろう。生まれてきたら幸せになれないかもしれないから、生まれてこない方がよい、というのは、過度に一般化しすぎなのである。

生まれてこない方がよかったと思っている人が、子どもをつくる行為について違和感を持つのは理解できる。たとえば、お前なんか産まなければよかった、というあまりにもひどい暴言を浴び続けて育った人の中には、子どもを持つことにエゴイズムを感じ、それを無責任に思う人もいるかもしれない。先の場合と同じように、この個人の考えを私は理解し尊重できる。

しかし、一般に、子どもを持つかどうかは、個人の選択の自由に任せるほかない問題であって、それ以上の原理はない。たしかに、子どもを持つことには大きな責任が伴うし、その責任を軽く考えてはいけない。実際、無責任な親も存在する。そうだとしても、選択の自由は保障されるべきであり、子どもを持つ自由も持たない自由も尊重される社会設計が普遍性を持つ、と私は考える。もちろん、自由の普遍性とは異なる社会原理に基づいて、考えを進めていくこともできるだろう。だが、その場合、どういう原理で社会を構想するのかについて十分に説明し、多くの人が納得しうるものにしていかなければならない。

こうして、先の投稿には不明瞭な部分が多く、真偽を判定するための材料が十分に揃っていない、ということが分かる。一言でいえば、議論の前提が成立していないのだ。ところで、これはいかにもプロっぽい回答だろう。しかし、ここで重要なのは、もっともらしい私の「答え」を使って反撃することではなく、自分なりの言葉と論理を組み立ててみることである。先の投稿の代わりに私の主張を採用してしまえば、考える〈私〉の存在が希薄である状況はさして変わらない。これでは善のパッケージに飛びつくのと同じである。

ＳＮＳで述べられていることを漠然と受け入れたり、逆に猛烈に批判したりするのではなく、まずは〈私〉にとって、その事象はどういう意味を持つのかを深く掘り下げてみるのだ。ちなみに、先の例は私が適当につくったものであり、現実の投稿ではない。だから、そこに批判すべき相手はいない。反射的な批判や論破からは距離を置いて、〈私〉の洞察と表現に

Ⅲ

。そうして、〈私〉を浮かび上がらせるのだ。

（岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注

1 ポスト・トゥルース――真偽や善悪とは無関係に、人の心を捉えたものが事実として認められる風潮のこと。

2 先の投稿――「生まれてきてしまったら幸せになれない可能性が高いことが哲学では証明されているから、生まれてこない方がいいし、子どもをつくるのは悪いことだと思う。」という筆者が仮につくった投稿のこと。

問一　傍線部（ア）～（エ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）キョウハク

1　違法なトバクを摘発する
2　ハクリョク満点の映画だ
3　ハクライの眼鏡を愛用する
4　景気回復にハクシャがかかる
5　壁面のハクリを修復する

（イ）サンショウ

1　テンタイショウの図形を探す
2　大使を本国にショウカンする
3　論文のショウロクを提出する
4　権力をショウチュウに収める
5　大会にショウジュンを合わせる

（ウ）ベンギ

1　ジギにかなった発言をする
2　ギコウを凝らした文章を書く
3　リチギに贈り物を欠かさない
4　世相をギガ化して批判する
5　この昆虫は植物にギタイする

（エ）シシツ

1　社会フクシ事業に取り組む
2　会社のシホン金を増額する
3　記者会見のヨウシをまとめる
4　首相がシセイ方針演説を行う
5　シンシな態度で業務にあたる

問二　二重傍線部ⅰ・ⅱの本文中の読みとして適当なものを後の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

ⅰ　晒され
ⅱ　騙され

1　つぶされ　　2　だまされ　　3　ひるがえされ　　4　さらされ
5　さとされ　　6　けがされ　　7　けなされ　　8　そそのかされ

問三　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語句・表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

Ⅰ　1　雀躍　　2　走狗　　3　耽溺　　4　蔓延　　5　籠絡

Ⅱ　1　カタルシス　　2　コンテクスト　　3　イメージ　　4　リアリティ　　5　レトリック

Ⅲ　1　水をあける　　2　旗を巻く　　3　一石を投じる　　4　秋波を送る　　5　軸足を移す

問四　本文中の空欄《 a 》～《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

成長の過程で欲望が変われば、それに応じて何を幸せと感じるのかも変化するからだ。

1《 a 》　2《 b 》　3《 c 》　4《 d 》　5《 e 》

問五　空欄 X ・ Y に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X

1　周囲を省みることなく、「私以外は悪」に支配されてしまう
2　自然な世界確信として、「人それぞれ」が常態化してしまう
3　絶対的な価値を重視し、「普通とは何か」を論じられなくなる
4　議論の際には常に、「根拠の提示」を求めるようになってしまう
5　事実を事実として認めず、「科学的知」の価値が喪失してしまう

Y

1　不自由な取捨選択を強いられても、〈私〉の生は妥協の産物ではないと言い聞かせようとする
2　抗いがたい大きな流れのようなもののなかで、〈私〉が〈私〉であると確信できる時がほしい
3　いかに〈私〉らしく生きていくことが困難であっても、否応なしにそれを継続せねばならない
4　〈私〉自身による選択の幅が制限されている中で、わずかでも自分の意志の力を信じていたい
5　〈私〉が選んだことも、〈私〉が選べなかったことも含めて、生の全体を受け入れようとする

問六　傍線部A「幸せ」の本質を踏まえて筆者が行った考察の内容として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　幸せの「理念」を概念的に考察すると、人それぞれとしか言いようがないものである幸せの「状態」についても一定の意味付けが可能である

2　幸せがどのようなものかは人や状況によって変わりうるという現実に折り合いをつけることを前提として、人は独自の幸せの形を求めている

3　幸せの追求とは、環境や能力などの条件によってあらゆるふるいにかけられた先に行きついた「いま」を肯定するための理由探しだと言える

4　幸せについて思索する行為には、すべてが欲望のままにはいかない人生を積極的に引き受けようとする人間のあり方を看取することができる

5　幸せとは何かという普遍的な命題の答えは、種々の選択を重ねて勝ち得た自分の人生に意味を見出したいという人の意識の表れと言える

問七　傍線部B 今度は、（二）である。とあるが、（二）についての筆者の考えの説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　投稿者個人の考えとしては傾聴に値するが、一部にしか該当しないことを広く適用しようとしているきらいがある
2　投稿者の不幸な来歴を考慮すればこの投稿の主張も理解が可能で、同情と尊重をもって受け入れるべきものである
3　子どもを持つことを含め、個人が何かを選ぶ「自由」という権利は他の諸権利に先んじて大事にされるべきである
4　真偽を判定するための材料が、意見の出典が曖昧にでも示されていた（一）以上に不足していると言わざるを得ない
5　投稿者が自由の価値を重視していないことは理解できるが、それに代わるビジョンについての説明が不十分である

問八　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　現実世界はサイバースペースよりも大きいがゆえに、そこには真偽不明で発信元も定かではない情報が溢れている
2　情報を扱う手法は多く存在するが、本質的に求められるのは情報に対する思考の巡らし方を身につけることである
3　ネット上の投稿の不明瞭な部分を少なくして真偽を判定すべく、その材料を補うためにこれを二つに分けて論じた
4　幸せを哲学的に考察することは、種々の社会的な事情で不幸せな状態にいる人の助けになるほどの力は持ちえない
5　選択に伴う責任を認識しつつ、人がそれぞれの人生を選ぶ自由が尊重される社会構築を志向していくべきだ
6　ネット上の投稿に対する見解も一つの考え方に過ぎず、多くの批判を受けることで錬磨されると筆者は考えている

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私たちは日常、「知っている」という言葉をごく気軽に使っている。「女優の誰某さんが結婚したの、知っている」といった発言は、通常はその情報をなんらかの手段で手に入れて、それを確信しているといった程度の意味である。その情報は事実なのか、検証した結果か、情報源は信頼できるのか、そういったことはほとんど気にも留めず、「知っている」と語ってしまう。そこでは「知る」は「思う、考える、信じる」とあまり違わない。

しかし、「知っている」という言葉を厳密にかつ正しく用いようとすると、いくつかの条件をクリアする必要があり、そこで本当に「知る」と、たんに「そう思う」の決定的な違い[A]が明瞭となる。

まず、「知る」というからには、その内容が真実でなければならない。「1 + 3 = 4だと知っている」とは言えても、「1 + 3 = 5だと知っている」とは言えない。もしそんな主張をした人がいても、「あなたはたんに知っていると思いこんでいるだけだ」と否定されてしまうだろう。

では、真実を所持していればそれがソク(ア)「知る」かというと、そうでもない。たまたま当てずっぽに真実を言っただけかもしれないし、なぜそうなのかを説明できないかもしれないからである。「知る」と言えるには、真実の命題を持つことの理由や根拠を説明できることが必要なのだ。そういった理由は、その命題だけを単独で説明するものではなく、関連する諸命題やそれからのキ(イ)ケツなども総合的かつ体系的に説明できるものでなければならない。その意味で、「知る」とはどこか[I]な事実や情報にのみ適用可能なものではない。《　a　》

この条件から「知っている」と言える場合を判定すると、日常生活でのさまざまな情報の把握や、人生における信念のほとんどがその基準に当てはまらないことが判明する。社会で「こうだ」と言われている一見自明な例でも、それから外れる反例や例外や矛盾が見つかることが多く、厳密に根拠をもって「知っている」と断言できるケースはほとんどないことに気づく。

では、強い条件に当てはまらないものはすべて「知らない」と言うべきなのか。いや、私たちは日常生活で、その方向で考

え行動することはまずない。女優の結婚のニュースを聞いて「本当は知らないけど、結婚したと思う」などと一々付け加える人はおらず、あらゆることについて「知っている」とは言わない状況を想像すると、かなり窮屈に感じられる。私たちはむしろ、ほとんどの場合、強くそう思っていることやほぼ確信していることを「知っている」と表現し、そうしたやり取りで社会を生きている。《　b　》

逆に考えると、そうして大体そうだと確信していることを「本当ではない」とか「根拠がない」とするには、かなり強い理由と議論が必要となる。大衆紙で報道された女優の結婚のニュースに対して、それは虚偽であるとか、根拠がないとか言い立てるには、他の情報媒体を徹底的に調べるとか、関係者から直接証言を得るとか、あるいは証拠を手に入れるなど、強力な反証が要求される。つまり、私たちは生きているなかで、「知っている」と確実に言えないものについても、大体は間違いないと思っている限りは「知っている」と見なして判断や行動を行っており、それを否定することの方がよほど［　Ⅱ　］ことなのである。

これは何故か。私たちは「思う」ことに基づいて行動し、生きており、そういった「思いこみ」が強い基盤や指針となっているからであろう。ソクラテスが「知る」と「思う」は決定的に異なるとして両者の間に［　Ⅲ　］ことは、まさに私たちの生の安寧を揺るがす暴力的な介入となった。「それは一体何か。あなたは本当に知っているのか」という問いかけは、たんに相手の認識を問いただすだけでなく、その考えに基づいて生きてきたその人の人生そのものを揺るがし、破壊する可能性すら孕むものだからである。《　c　》

ソクラテスは「知っている」と言えるためには、真実であること、根拠を説明する必要があることをウッタ(ウ)える。つまり、合理的に基礎づけられた、整合的な信念の全体だけが「知る」と呼びうるのだと認めさせる。それは逆に、漠然と、しかしかなりの確信をもって「知っている」として生きてきた数多くの信念が、偽を含むことや確実性のないこと、あるいは理由を説明できないこと、他の信念と不整合を来すなどの理由から、「知る」ではないとして退けられる事態を招く。だが、そういった信念が偽であるかもしれない「思う」に過ぎないと認めることと、「知らない」と否定形で認めることの間には、まだ溝が

あるように感じられる。私たちは、自分が信じている命題が「そう思う」に過ぎないといっても、それを強く確信する限りで限りなく「知る」に近い、ないしはその代替物となり得ると漠然と期待している。ソクラテスは「知らない」と否定することで、その間のあわい期待やあいまいな結びつきを断ち切る。その意味で彼は、自分がたんに「思う」状態にいるのではなく、断然と「知らない」と語るのである。

したがって、「知らない」と認めることはきわめて［X］なのである。ソクラテスが対話をつうじて論理的に提示し、相手の考えを論駁してアポリアー[注]に至る軌跡は、きわめて多難な探究の道筋であり、多くの対話相手はそれでも自分が「知らない」ことを認めるのを拒絶するか、その状況から目を背けるのである。

最初から不知を気取り、探究の悩みも苦しみもなしに「知らない」と宣言してその境地を弄ぶ人がいれば、その人はもっとも自己の何たるかを知らず、安逸に空虚な言葉を発する、無責任な非哲学者に過ぎない。本当に「知らない」と語りうるのは、有限なる人間の深淵を覗き込んだ者だけである。それを自慢げに自分の「知恵」だとする者がいれば、欺瞞の極地であろう。無論、ソクラテスはそんな人間ではない。

ソクラテスはまず自分が「知らない」と認めてから共同の探究を開始し、その結果として対話相手と一緒にアポリアーに直面し、やはり「知らない」と認めることで対話を終える。そうして最初と最後をつなげてみると、ソクラテスには何の進歩もなく、つねにカッコ(エ)とした不知の自覚に留まりつづけているように見える。だが、ソクラテスにとってそんな対話や探究が無意味なわけではない。少なくとも二つの理由が考えられる。

まず、B「知らない」という自覚は一旦得られたらそのまま持続するものではなく、つねにその都度の「思いこみ」を否定し退けない限り留まることすらできないものである。私たちは生きているかぎりいつも「こう思う」と判断を下し、その信念に則って行動する。その決断や経験は「思う」をいつしか「知る」へと転化させ、自信を持って確信して疑わない態度へと硬化させてしまう。それに抗いながら、その確信が根拠を欠いた「思いこみ」に過ぎないことを突きつけていく不知の自覚は、維持そのものが容易ではない、緊張を伴う吟味の結果なのである。ソクラテスはそれゆえ、その都度「知らない」と言いうるた

めに人々との共同探究を続けるのである。

さらに、ソクラテスは吟味探究をつうじて自らの「知らない」という自覚を深めていく。対話は特定の主題について限定的な検討を加えていくが、そこで明らかになった「知らない」という事態は、その当の探究という枠組みにおいて成り立つ部分的な自覚に過ぎない。例えば、「勇気とは何か」をめぐってラケスとニキアスという二人の将軍の考えを吟味して到達したアポリアーは、あらゆる条件や思考を退けて獲得された「知らない」ではなく、あくまでその場で彼らとの合意に基づいて得た限定的な認識に過ぎない。だが、そういった対話を重ねることで、ソクラテス自身はあらゆる候補や可能性を吟味しつつ、やはり「知らない」という事態を確認していく。《 d 》

ソクラテスはそのような不知の自覚に、どこまで留まりつづけたのか。また、どこまで留まる必要があるのか。ここに多くの解釈者が陥ってきた一つの見方があり、それは誤りであると私は考えている。すなわち、ソクラテスが探究によって「知らない」という自覚を確保したのは誤った思いこみをまず除去する必要からであり、それが完了した後には本格的な探究によって積極的に「知る」を獲得することができる、という見方である。それを「二段階説」と呼ぶことにしよう。

ソクラテスの吟味論駁はあらゆる「思いこみ」を破壊し退ける否定的な過程であり、それは非生産的で不毛なあり方である。そんな先入見をもつ論者は、ソクラテスが「知らない」と表明する境地は、まず立つべき出発点や準備段階に過ぎず、余計で邪魔な臆見(あ)を排除して浄化するのが「不知の自覚」の役割だと考える。その作業が Ⅳ 「知らない」という境地は必要でないばかりか、「知る」に向かって実際に変化していかなければならない。そうして二段階の前半に「不知の自覚」を位置づける論者は、プラトン作と伝えられる『クレイトフォン』篇の話者のように、論駁と否定だけを進めるソクラテスの議論に不満を募らせ、はやくその後に積極的真理を示し「知る」に至らせてほしいと切望する。二段階説の信者は、こうして否定的なソクラテスの論駁を超えた先に、「イデア」を立てて真理と知識へと進むプラトン哲学を期待する。なんと安易な考え方だろうか。そして、完全に間違っている。

この説の間違いは大きく二点ある。まず、「知らない」という自覚が探究の結果すぐに得られて、それでそのプロセスが完

了すると見なす点が間違っている。すでに見たように、「知らない」という自覚は一回の吟味で得られるものでも、到達して終わるものでもない。探究をつづけて不知の自覚に留まり、さらにそれを深めていくことがソクラテスの営みだとしたら、適当な時期までその準備作業をすれば済むという話ではない。不知とはさらに厳しいものなのだから。《 e 》

さらに、「知らない」という自覚の境地と「知る」という哲学探究が正反対のものであり、相容れないという前提も疑ってかかるべきであろう。本当に「知らない」と断言することの難しさはすでに見てきたが、もしその自覚が「知る」ことへの何らかの関わりにおいてのみ可能であるとしたら、「知らない」という自覚においてこそ、私たちはすでに「知る」ことに深く、根源的な意味で触れているのではないか。まず、「知」とは事物のように所持したり手放したりする対象ではない。そして、「知らない」という否定においてもっとも強く自己と知との関わりが自覚されるのだとしたら、知へと向かう哲学の探究はその都度「知らない」という確認においてのみ遂行され、その深まりにおいてより本格的に「知る」ことに私たちを関わらせるのではないか。こう考えるとしたら、ソクラテスによる「知らない」という表明は、探究初期に必要な浄化の下準備などではなく、探究の全体をつうじて最後まで基盤となる決定的な自覚であり、それのみが真に知への関わりを可能にする条件だと言えるはずである。

その限りで、ソクラテスが「知らない」と語る哲学は、プラトンが「イデア」という絶対的な存在を示した哲学と一体であり、その全体を支える基盤だったのである。

（納富信留「知らないということ」による。）

注　アポリアー――哲学的難題に突き当たり行き詰まった状態のこと。

問一　傍線部（ア）～（エ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）ソク

1　ソクサイに一年を過ごす
2　ケッソクして事にあたる
3　野菜をソクセイ栽培する
4　新しい国王がソクイする
5　ジンソクな行動を心がける

（イ）キケツ

1　人生のキロに立たされる
2　北カイキ線を船で越える
3　キセイ概念にしばられる
4　条約の案文をキソウする
5　実にスウキな巡り合わせだ

（ウ）ウッタえる

1　病人に適切なソチをとる
2　意思のソツウを図る
3　ソキュウ力のある広告
4　意気ソソウしてしまう
5　彼は絵画のソヨウがある

(エ) カッコ

1 図書館のショコに入る
2 釣果を友人にコジする
3 どうにかココウを逃れる
4 法案成立にダンコ反対する
5 あらゆる人にモンコを開く

問二 空欄 Ⅰ ～ Ⅳ に入る語句・表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

Ⅰ
1 画一的　2 間接的　3 巨視的　4 段階的　5 断片的

Ⅱ
1 油を注ぐ　2 鼻を鳴らす　3 骨の折れる　4 雲を摑むような　5 向こうを張る

Ⅲ
1 釘をさした　2 ひそみに倣った　3 楔を打ち込んだ　4 弓を引いた　5 甲乙をつけた

Ⅳ
1 完了した暁には　2 踵を接するなら　3 連綿と続くうちは　4 頓挫した刹那　5 埒が明かないとき

問三　傍線部（あ）臆見の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　当て推量に基づいた意見
2　他人の影響を受けた意見
3　誤りを含む非生産的な意見
4　常識的に正しいとされる意見
5　傾聴に値しない感情的な意見

問四　本文中の空欄《　a　》～《　e　》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

それは不知を深め、その真相を見ていく経験だと言えよう。

1《　a　》　2《　b　》　3《　c　》　4《　d　》　5《　e　》

問五　傍線部A 本当に「知る」と、たんに「そう思う」の決定的な違い とあるが、「知る」および「思う」についての説明として適当ではないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　何かを「知る」と言えるためには、その知っている内容が真に正しいものである必要がある
2　知っている内容がなぜ正しいと言えるのかが説明できて初めて、「知る」と言うことができる
3　「思う」の領域にあるものを、検証を経て確実性を高めたものを私たちは「知る」と呼んでいる
4　私たちは、ほとんどの場合、強くそう「思っている」ことを「知っている」と表現して社会を生きている
5　「思う」と「知る」を分けることは可能だが、私たちはそれをせず思い込みを基盤にして生きている

問六　空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　哲学的な態度ではあるが、確信の契機を逸しかねない行為
2　反日常な態度であり、日常生活の基盤を掘り崩す危険な挑戦
3　無理難題であり、ソクラテスの評価を下げている一つの要因
4　ソクラテスに対する敗北を意味し、多くの論者が拒んだもの
5　堅牢な意思をもって臨む、ある種宗教的ともいえる修行の一種

問七　傍線部B「知らない」という自覚とあるが、ソクラテスの対話や探究にとっての「知らない」ということの説明として適当ではないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「知らない」でいることで、「思う」が「知る」に転化してしまうことを防ぎ、探究を継続していく契機となった
2　物事の探究にあたって不必要な思いこみを取り除くには、まずは「知らない」という認識を持つ必要があった
3　「知らない」という状態は常に一定のものではなく、探究を通じて深まり、その姿が明らかになるものである
4　「知る」ことへと自身を導くものであり、「知る」という探究の対極が「知らない」という意識ではない
5　「知らない」がゆえに探究する枠組みを限定したうえで、やはり「知らない」という認識に至る対話を重ねた

問八　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　私たちは日常、大体は間違っていないと思うことを「知っている」と表現し行動することにさして問題を感じない
2　他との因果関係を考慮することなく「知っている」と言える事柄は、発話者本人の事情ぐらいしか想定できない
3　真に「知っている」のかを逐一他者に求めるため、ソクラテスは社会に暴力的な介入をなす人物とみなされていた
4　ソクラテスが「知らない」という認識にとらわれ、そこから脱するまでには多くの対話や研究の積み重ねを要した
5　「知らない」と「知る」を隔絶したものと考えるところに、筆者は従来のソクラテス研究の問題点があるとみている
6　ソクラテスの哲学の基盤としてあった「知らない」は、プラトンに引き継がれ「イデア」として哲学的に完成した

国語解答用紙　7日［◎］

一

問一
（ア）①●③④⑤
（イ）①②③④●
（ウ）●②③④⑤
（エ）①●③④⑤

問二
i ①②③●⑤⑥⑦⑧
ii ①●③④⑤⑥⑦⑧

問三
Ⅰ ①②③●⑤
Ⅱ ①●③④⑤
Ⅲ ①②③④●

問四
●②③④⑤

問五
X ①●③④⑤
Y ①②③④●

問六
①②③●⑤

問七
●②③④⑤

問八
①●③④●⑥

50点

二

問一
（ア）①②③●⑤
（イ）①●③④⑤
（ウ）①②●④⑤
（エ）①②③●⑤

問二
Ⅰ ①②③④●
Ⅱ ①②●④⑤
Ⅲ ①②●④⑤
Ⅳ ●②③④⑤

問三
（あ）●②③④⑤

問四
①②③●⑤

問五
①②●④⑤

問六
①●③④⑤

問七
①●③④⑤

問八
●②③④●⑥

50点